

プロローグ  
科学信仰と生命「機械論」は、崩壊した 9

- “原爆”と“ペニシリン”は人類を救ったか？ 9
- 科学の“何”が、まちがったのか？ 10
- 生命は精巧な機械と主張する人々 11
- 生命「機械論」が閉ざした二つの道筋 12
- 「生命」は電気と磁気、の力に支えられている 14
- 物理学と生物学の統合による革新 14
- 生命とは、電磁場の中の電磁場…… 15
- 自己治癒力の希望、環境破壊の絶望 16

第1章 人類を襲う新たな難病、奇病

- 人工電磁波の氾濫で、難病・奇病が急増した 18
- どんどん弱まる人類の抵抗力 18
  - 新しい病、“電磁波過敏症候群” 19

- 特定の周波数に敏感に反応 21
- コンピューターで目まい、吐き気…… 21
- 溶鉱炉の中に入ったような錯覚 23
- 抑うつ、記憶力減退、不眠症、けいれん 24
- 新しいタイプの病気“慢性疲労病”の正体 26
- 過敏症と疲労病はシリコンバレーで多発 27
- エイズウイルスをも生んだ電磁波？ 28
- 免疫システムを妨害する電磁波 30
- 自閉症、ダウン症、乳児突然死、アルツハイマー…… 31
- 小児自閉症と電磁波の奇妙な関係 31
- マイクロ波は神経細胞を激しく損傷 33
- X染色体異常およびダウン症 34
- 新生児が産院で晒される異常電磁波 35
- 脳も神経も異常電磁波に極めて過敏 36
- 乳幼児突然死症候群（SIDS）の悲劇 37
- アルツハイマーと電磁波照射実験の結果 39
- チンパンジーはアルツハイマーになった！ 41
- 三〇年でパーキンソン病が五〇％増 42

- 世界的なガン急増の背景に、電磁波の濫用と被曝 42
- ガン発生率と電磁波のミステリアスな関係 42
  - メラノーマ（黒色肉腫）が四〜五倍に 44

●強力な電磁場に晒されていた！ 45  
●米国民二割が重い精神障害、若者自殺二〜四倍増！ 46

●アメリカ人二〇%が重い精神障害者 46  
●若者の自殺、男性四倍、女性二倍増…… 47  
●市民が学び、立ち上がり、行動するしか道はない 49

●私たちはこれからどこに行くのか？ 49  
●危機感を持たない研究者と行政機関 50  
●一人一人が危機にめざめる時だ 51

## 第二章 自然界の電磁波、その恵みと脅威

「宇宙」は、電気と磁気に満たされている 54

- 目に見えぬ不可思議な力が満ちる 54
- 生命を守ってきた地球の地磁気圏 55
- 電磁場強度と生命のリズム 57
- 太陽風と磁気嵐とオーロラ（極光） 58
- 磁気嵐は人間の精神にも大きく影響 59
- SN磁極反転による生物種の大絶滅 61
- 沈殿層中の放散虫の絶滅と進化の謎 62
- ダーウイン進化論を否定する「断絶」 63
- 磁気反転で有害太陽風と放射線が襲う 64

## 第三章 未来に向け、新たなる科学の革新

●地球磁場の周波数変動が生存能力を奪う 66  
●磁場の変化が「進化」をうながす 68

●凄まじい磁場変動を生み出す現代人 69  
●地磁気の磁場と生命の起源をたどる 70  
●「手の命題」を解く磁場の奇跡とは？ 71

●人類が創ったもう一つの危機「電磁波」 73

- 生物は地球磁場から「情報」を受け取る 76
- 「電流」と「磁場」の不思議な関係 77
- 電磁波とは電気と磁気のエネルギー波動 78
- 電磁スペクトル四分の三は「光」である 80
- 光（フォトン）は「波」であり「粒子」だ 81
- 測定技術の発達が理論の正しさを証明 82
- 地磁気と生物の周期はリンクしている 84
- 生物は一日の磁気変化を「時計」としている！ 85
- バクテリアの体内に取り込まれた磁石 86
- 磁石は微生物の「コンパス」として機能する 87
- 伝書鳩が迷わず巣に戻る驚異のメカニズム 88
- 実験で証明された鳩の磁気方向感覚 88

● 鳩は地磁気から方向感覚を得ていた 91

● 電子顕微鏡で確認された脳内磁性体 91

● 高性能の磁気コンパスより優れる 92

### あらゆる生命は、体内に「磁気コンパス」を持つ 93

● 人間の脳にもあった「磁気感覚」器官 93

● トカゲはどうして故郷にたどり着く？ 94

● あらゆる生命体に「磁気器官」が存在 96

### 「第三の眼」松果体も、外部の磁気を感じする 96

● 「分泌腺の主人」松果体の磁気感覚 96

● 生命サイクルを支配する「時計」 97

● 精神神経病とガンの治療にも関連がある 99

● 松果体が乱れれば心身は失調する 100

● 生物は電磁場と可視光線から外部情報を得る 100

● 生体内に完成された二重神経系 102

● 未来の新たな「電磁エネルギー」医療の可能性 104

## 第四章 現代社会が作り出す電磁波汚染

### 電気文明の夜明けは、人類に何をもたらしたか？ 108

● 偉大なる技術の「勝利」への疑問 108

● 放電、電磁エネルギー、共振、波動…… 109

人類は電磁波エネルギーの「海」を泳いでいる 110

● 社会は電気への信じがたい力で形成された 110

● われわれを取り巻く異常電磁波の出現 111

● 急激かつ猛烈な「進化」と「発展」…… 112

● 対人攻撃の電磁エネルギーすら開発！ 114

● 電磁波の「汚染」は、眼には見えない 115

### ついに、最初の健康障害が、現れてきた…… 116

● 労働者は原因不明の気分悪さを訴えた 116

● 体温が、わずか一五分間で二度も上昇！ 117

● めまい、吐き気、電磁波治療機の副作用 118

● マイクロ波レーダー操作員たちの「症状」 118

● 無視された実験結果、白内障は起こった 120

● 網膜まで損傷されていた！ 121

### 「恐怖」は、しだいに明らかになってきた 122

● 軍事機密の前に、事実隠蔽されている 122

● 説明不能の出血、白血病、脳腫瘍の増加 123

### どこまで、電磁波は、危険なのか……？ 124

● 最初の「安全基準」が設定されたが 124

● そして、初めて発ガン性が「証明」された 125

### 巧妙に「都合な真実」を隠す研究者たち 127

● わざわざ無菌動物を使用したナゾを解く 127

- マイクロ波でガンは四倍に増えていた！ 129
- マイクロ波照射ストレスがガンを誘発 130
- 電磁波照射は極めて強いストレスとなる 130
- 狡猾に計画された空軍の「安全性」実験 131
- 政府と軍部は、的はずれな「安全基準」を公表 132
- 身長とアンテナを同一視!? 奇妙な「理論」 132
- 「熱効果」のみでごまかし続ける悪質さ 133
- マイクロ波は遺伝子にも影響する 134
- 胚細胞や染色体に異常をもたらす 135
- **ダウン症、脳腫瘍、生まれてくる子どもが犠牲に** 136
- 電波中継基地の街のダウン症一〇倍！ 136
- レーダー操作員の父親、脳腫瘍の子が多発 137
- マイクロ波が急増し脳腫瘍も急増した 139
- 送電線からの超低周波放射も危険だ 140
- **米軍の超低周波交信「サングイン計画」を中止に** 141
- 潜水艦との交信を目指す「凶暴」な計画案 141
- 一〇人中九人に著しいストレス反応 142
- **送電線で自殺が増える、子どもがガンになる!** 144
- ニューヨーク州で送電線被害の調査開始 144
- 送電線など低周波を浴びると自殺が増える 146
- わずか三ミリガウスで幼児は発ガンしている 147

- 幼児の発ガン率に重大な関係あり 147
- ついに発ガン性を認めたニューヨーク州 148
- 送電線から一五mで一〇〇ミリガウス 149
- **電磁波で、ガンは何倍、何十倍にも増えていく** 151
- 低周波でガン細胞は数百%も増殖する 151
- ガン細胞を一六〇〇%も加速、悪性化 152
- 脳腫瘍の発生率はなんと一三倍に激増 153
- **学習障害、行動異常、免疫低下……異常が続出する** 154
- 目に見えて学習レベル低下は長く続く 154
- セロトニン、ドーパミンが著しく抑制 155
- 電磁波照射ラットは伝染病で「全滅」 156
- バテル研究所の露骨な、もみ消し工作 157
- **人工電磁波は「周波数に関係なく」有害である** 159
- あらゆる周波数で先天異常、奇形が発生 159
- 一ミリガウス微弱電磁波でも胚に異常 160
- 遺伝子、染色体も攻撃、破壊される 161
- マイクロ波が低周波に変調されて生体を侵す 163
- 放送タワー周辺にあらゆるガンが多発 165
- **電磁波の「一〇大危険性」に目覚めるべきだ** 166
- 人類の「不安」は現実となった 166
- ガン増加は電磁波被曝が明白な原因だ 169

子どもや孫の未来のため、市民よ立ち上がれ！ 171

●まず、弱い胎児が犠牲となる 171

●未来の世代に与える電磁波の脅威 173

## 第V章 超低周波と人間の意識・ 精神の謎に迫る<sup>せま</sup>

あなたは自分の意思で行動しているだろうか？ 176

●意識とは自由意志とは、はたして何か 176

●意識は、はたしてどこに存在するの？ 177

外界の電磁波は知らないうちにあなたを動かす 178

●人間の意識や行動を左右する電磁波 178

●磁気嵐のとき精神科病院の患者が増える 179

「生理」「意識」は見えざる電磁場に左右される 180

●宇宙飛行研究に欠けていたもの 180

●脳の中核に「快樂領域」が存在する？ 182

「感情」「行動」を遠隔操作した学者 183

●デルガード博士、闘牛の恐るべき実験 183

●「精神」は脳の電気刺激によって生み出される!? 185

動物は本能的に「快樂」を求める 187

●キャンベル博士のデルガードへの反論 187

●人間は理性的思考で快樂を得る 188

●実験動物の行動で発生した超低周波 189

外部から低周波照射で「感情」を支配する 190

●脳への低周波刺激と精神コントロール 190

●人間精神と超低周波との深いつながり 192

●意識喪失を起こす電磁波と脳内電流 193

●記憶、論理、創造——「精神の母屋」<sup>おもや</sup> 195

## 第VI章 電磁波被害メカニズムを解明する

電磁波の害は、タバコの害以上に明らかだ 198

●科学者たちは余りにも無知である 198

●人間は水を満たしたヤカンか？ 199

●物理的「説明」の落とし穴にはまる 200

●「非熱」「発熱」議論のクツケイさ 200

●喜劇的「アンテナ理論」と発熱効果 202

●問題は発熱現象のみではない 204

「見えない」力が細胞を破壊している！ 205

●神経細胞からカルシウムイオン流出 205

●ヒントとなる核磁気共鳴現象 206

「サイクロトロン共鳴」すべて謎は解けた！ 207

●カルシウムイオン放出と「サイクロトロン共鳴」 207

●細胞が「破壊」されるメカニズム 208

●電磁エネルギーが運動エネルギーに 210

●実験が証明した恐るべき事実 211

●すべてを動かす「共鳴」現象の神秘 213

●生物学的共鳴とその働きを探る 214

●臓器の共鳴波形で映像を読み取る 215

## ハンド・パワーとMRIは同じ原理 216

●磁気共鳴と治療現象の神秘 216

●ハンドヒーリングは極めて科学的治療法だ 218

●超能力、超常現象も説明できる 219

●超能力の奥深い神秘に迫る 220

## 電磁波は染色体を破壊し分裂を阻害する 222

●観察される様々な異常分裂 222

●異常電磁波で生命活動は破壊される 223

●生命固有の磁気特性が乱される 224

●直流磁場がガン細胞を破壊した！ 226

●想像を超える複合的電磁共鳴現象 228

●人類と地磁気を結び付ける「新発見」 228

## 第四章

### リスクベネフィット 危険と利益の比較、 解決へ提言する

巨大な力が電磁波汚染と被曝を推進している 232

●さて、あなたに何ができるだろう？ 232

●まずリスクとベネフィットを比較する 233

被害は「強度」×「時間」で決まる 235

●被曝線量の考察 電気剃刀と電気毛布 235

●電気毛布はアウト、電池剃刀はOK 236

「安全基準」は「ミリガウス」、居住地は〇・一ミリガウス 238

●電磁波の安全基準は一ミリガウス以下 238

●身の回りの電磁波を測ってみる 239

●ブラウン管式テレビの危険性 240

●パソコン・オペレーターに流産集団発生 242

●コンピュータの電磁波漏れは「情報」漏れ 244

●先天異常、白内障、生理不順、不眠…… 245

●電磁波被曝による流産発生率は二倍 246

●せめて画面から三〇インチ離れる！ 248

●女性は妊娠したらコンピュータ業務から離れる 248

●学校でのコンピュータ授業への不安 249

蛍光灯、頭上から電磁波を浴びる 250

● 蛍光灯はどれだけ危険か？ 250

● 教室の蛍光灯と子どもたちの行動障害の関係は？ 252

電気時計、ドライヤー、電気ヒーターも注意 253

● 枕元の電気時計はすぐやめる 253

● 美容師になぜ乳ガンが多いのか？ 253

● パネル・ヒーター、ベビーベッドに近づけない 254

● 電気による床・天井暖房は危険すぎる 255

● マイクロ波が洩れる！ 電子レンジに近づくな！ 256

● マイクロ波の「安全」レベルはいまだ不明 257

● 無線機・コードレスホン・携帯電話 258

● 身の回りの電磁波を測る方法 259

電波塔が発信する「電波」も危険だ 261

● テレビとFM、AM放送タワーもあぶない 261

● FM電波を浴びるほど白血病が増える 263

「とるに足りぬ問題」(米環境保護局(EPA)) 264

● 市民は自己防衛するしかない 264

● 放送タワーから八〇〇メートル離れる！ 265

● 全米に危険な「ホットスポット」二〇〇カ所 266

● マイクロウェーブの危険度は？ 267

電波「安全基準」は二平方当たり〇・二ミリワット以下に 268

● マイクロウェーブ問題の解決 269

● テレビ塔は、衛星放送(DSB)で不要となる 270

送電線で室内一〇ミリガウスならず引越せ 271

● 子どもには特に危険だ！ 271

● 反対運動は時間と労力がかかる 272

電力設備は過剰、「エネルギー危機」は嘘だ 273

● 電力不足で経済破滅は大嘘だ 273

● 余りに過剰な電力、余りに過剰な被害 274

電力供給を「集中型」から「分散型」に換える 276

● 巨大発電所を小規模発電所に 276

● 水力・風力・太陽など自然エネルギーを！ 277

企業は「利益」、市民は「健康」で対立する 278

● 企業と市民の双方の主張激突 278

● ナンセンスきわまりない「予測」 280

● 企業利益に奉仕する御用学者 280

● 市民の立場は余りにも弱い 282

● 健康と未来のため勇気の一步を踏み出そう 283

〈訳者解説〉有害電磁波の悲劇はすでに全人類を襲っている 284

● 大病院と放送スタジオのガンリスク 284

● 電話局エンジニアの肺ガン一〇〇倍！ 285

● 市民の側に立つ稀有な学者 287

● 世界最大の軍隊と一人対峙する 289

● 広大な宇宙から生命のミクロの世界まで解明 290

● 地球の固有波動と生命現象 290

● あらゆる生物に磁気器官（生体コンパス） 291

● アナログ系とデジタル系二重電流 292

● 電磁波の「一〇大有害性」を警告 293

● IH調理器や5Gは人類を滅ぼす 304

● 電磁波の危険性を人類の目から隠せ！ 306

● 「電磁波って何ですか？」（松下電機） 306

● 無意味な「熱効果」が「安全基準」!? 307

● 悪魔の電磁波利権を守るための悪質工作だらけ 309

● 単位ミリガウス（mG）を抹殺！ 309

● “闇の勢力”の“不都合な真実” 310

● 電波「安全基準」に一〇〇万倍大差 312

● 超能力と量子テレポーテーション 314

〈復刻版に寄せて〉地球市民の未来に希望を与える、  
永遠のバイブル—— 296

● 受話器の向こうで励ましてくれた温かい声 296

● 電話ありがとう。がんばりたまえ 296

● 驚嘆の真理「サイクロトロン共鳴」 297

● 後の「波動医学」に道を拓いたベッカー理論 299

● すべての組織、器官に固有周波数 299

● 「発生」「再生」「治癒」の解明 301

● 世界最大の軍隊と独りで対決 302

● ポール・ブローダー氏との出会い 303

カバーデザイン 重原隆  
本文仮名書体 文麗仮名（キャップス）



## プロローグ

# 科学信仰と生命「機械論」は、崩壊した

### ●「原爆」と「ペニシリン」は人類を救ったか？

第二次世界大戦が生んだ「科学」と「技術」における二つの成果――。

それは「原爆」と「ペニシリン」である。

これらは、われわれに新しい世界を約束してくれた。そこで、われわれは、自分たちの住む環境を完全に支配できるはずであった。家庭でも、車でも、ただでエネルギーが供給される。そして、病気からも解放される。人生を快樂のなかに過ごすことができる。

科学的知識が、順調に発展すれば、そうなるはずだった。そこで、科学的な探求は国家的目標となり、たとえば国立衛生研究所（メリーランド州。研究スタッフ二五〇〇名を擁し、<sup>米国</sup>政府の生理学、医学分野での研究の中枢的役割を担う。）や国立衛生試験所（現・医薬品医療機器総合機構）などが設立され、巨額の資金が投入された。

かくして、四〇年間、われわれの世界は「ビッグ・サイエンス」と「ビッグ・テクノロジー」という二つの概念によって形づくられてきたのである。

最初、希望は実現されるかのように思えた。成功は目前のように思えた。

しかしながら、事態は劇的に変化した。

いまやわれわれは、われわれの地球生態系は破滅の危機に瀕していることを思い知った。

エネルギーはただどころではない。医学の面でも、一九五〇年代に比べてほんのわずかし  
か進歩はない。ある部分では、まったく改善えきびようされていない。

なるほど、われわれは、過去の大きな疫病えきびように勝利はした。

しかし、今日ではエイズやガンなどの新たな悪性の病気に見舞われている。

### ●科学の何が、まちがったのか？

どうして、こんなことになってしまったのか？ どこで、間違ったのか？

いま、われわれになにができるのだろうか？

一九五〇年代にスタートした興奮と希望に満ちた科学技術の進歩。それは科学の巨大システムへと成長していった。この巨大なシステムは、いまや同じ技術の延長線上に、さらに突き進んでいく。それ以外には、今日の問題を解決していくことは不可能なようにみえる。

問題は科学それ自体なのではない。科学とは人間の努力に他ならない。

科学者たちは、ふつう新聞に描かれているような、常に真実を求める論理的な探求者というわけではない。やはり人の子である。他の人々と同じような失敗も犯す。

実際、現代の科学者の仕事とは次のようなものだ。まず、その成功は、発表された論文数の

多寡<sup>たか</sup>ではかられる。数が多ければ多いほど、より高い地位が保証される。

より巨額の研究費、より広い研究室、そして、決定権を持つ集団の一角におさまることもできる。

したがって、既成の学説には逆らわない、当たり障<sup>さわ</sup>りのない論文を多数発表する。学者世界のそうした状態の結果はどうか？ 既知の事実疑問を挟むテーマに喜んで取り組むような科  
学者がほとんどいなくなってしまうのだ。

むしろ、彼らは、過去の発見の遺物とも言えるわずかな問題に、もっぱらその思考を割く。  
そんなことで満足しているのだ。

このような現実が、停滞をまねく。そして、科学の進歩の足取りは遅い。知識の小さな切れ  
っ端を手に入れるのさえ苦痛に満ちているかのように見えてくる。その小さな断片とはすでに  
存在する壮大な建造物にとって、ちっぽけなカケラの付け足しにすぎないのに！

今日の科学は、その最も本質的な面をほとんど喪失してしまった。

それこそが「冒険の精神」である。

### ●生命は精巧な機械と主張する人々

トーマス・クーンがよく言うように、科学の発展の方向は、以下のように形成される。過去  
から引きずられた教条主義的体系の克服である。それは物象がどう動くかを解する新しい見方、

すなわち新しいパラダイムに取って代わられる革命的時代に形づくられる。

この変革は、約束をホゴにしつつある既成パラダイムの次第に増大する不具合と、現実をよりよく説明する新たな能力によってもたらされる。

ただし、すべての革命の時代における思考の変革は、既成パラダイム内で仕事をしている連中からの手厳しい反発にさらされる。

一九五〇年代のパラダイムは、生命の化学的「機械論」に基づいていた。

この見解に立てば、生き物とは化学的メカニズムの精緻な機械にすぎない。

その能力はこのモデルによって許される機能に限定される。そこでは生体の自律性とか、自然治癒という要素は入り込む余地はない。機械論の鑄型にはなじまないからだ。

この見解は、ついに一つのドグマとなる。その支持者たちは、「そこに存在するすべてを知る」ことは、すなわち、「生命について知ること」と主張する。

### ●生命「機械論」が閉ざした二つの道筋

この思考は、われわれの社会を支配したばかりでなく、同様に医学者たちをも支配した。そのため以下の二つの方途が制限されてしまった。

一つはある治療を行うために使われ得たであろう様々な方法が日陰に置かれてしまった。

もう一つは人間の肉体自身には治癒する能力が備わっているという事実が目覚める研究への

道筋が閉ざされたのである。

技術発達は医学現場で活用されてきた。ところが、一方で、予測だにしなかった副作用が生じてきたのだ。われわれ自身、その増え続ける代償を支払うはめに陥っている。

たとえば、ガンの治療技術である。

その大半が実は、なんとそれ自身に発ガン作用があることが、明らかになってきた。予期せぬ副作用は次なる“技術的補修”を必要とするようになる。

今やわれわれは、つぎからつぎに積み重ねられた技術的実験のための螺旋地獄らせんに、呑みこまれてしまっていることに気づく。

その終りは見えない。むしろこれでは患者の治療にはなんの役にも立たない。

生命の化学的「機械論」の錯誤の後に、いま一つの医学的革命が始まった。

機械論的思考とそれによって施される治療に対して募る患者側の不満だ。それらが今日、多くの内科医たちをかつて医学界から“非科学的”と捨て去られた治療技術の再検証や医療応用へと駆りたてている。

食事療法、ハーブ（香草）の使用、メディテーション（瞑想）、そして鍼灸治療しんきゅう……などがそれである。これらは、ほんの一例にすぎない。

こうした医療現場でのラジカルな変革は、古代の生命やエネルギー、そして医療の根本的な概念に深く根ざしている。それは、生き物に生来備わった治癒能力の再認識を含んでいる。

# 「生命」は電気と磁気の力に支えられている

## ●物理学と生物学の統合による革新

同時に、物理学と生物学の統合は、新しい化学の革新をもたらした。

それは、生物の中に秘められた予想外の複雑さや、以前なら夢想だにしなかった能力の数々を、明らかにしてきたのである。

生命の化学は、生体がその下に横たわる電気と磁気の力に支えられていることを解明した。われわれの肉体と脳は、われわれの体内と体外に電磁場を生じさせている。

私はこの事実を、まず拙著『ボディ・エレクトリック』（1985）で、明らかにした。

それ以来、世界中で、これに関する研究熱の盛り上がりが強まっている。

そして、より重要な発見の報告もあいついでいる。

この新しい見知は、生物学的な可能性の領域を広げただけにとどまらない。

われわれの地球環境の電氣的、磁氣的要素と生物とを関連づけて見せてくれたのである。つまり、われわれは地球の自然な磁場の中で生きている。

ところが一方で、膨大な地球規模の人工的な電磁波ネットワークを生み出しているのだ。

●生命とは、電磁場の中の電磁場……

今日の生命とは、電磁場の中の電磁場、そのまた中の電磁場と見なすことができる。

生命現象も、宇宙を形造ったものと同じ力によって、支配されている。

原初より、生命は地球の自然な電磁的環境に依存してきた。今日、この自然な電磁環境は、かつて決して存在しなかった人工的な電磁場の奔流に押し流されている。

前述の本（『ボディ・エレクトリック』）で、私は人間の身体電流について述べた。この『クロス・カレント』では、人間の肉体の電気と、地球本体の電気の両方が、いかにこの人工の電磁エネルギー濫用により変質し、損なわれてきたかを明らかにする。さらに、差し迫りつつある破局を回避するために、どのような第一歩を踏み出すべきか説き明かしたい。

この本に盛られた革新的な科学的知識の体系は、科学の衣装をまとった僧院の中でのみ利用されるものであってはならない。一般大衆にもよく理解できるような形の、実際に役立つ知識の体系でなければならぬ。私はそう固く信じている。

近い将来に予定される数多くの重要な政治的決定が、すぐにもそれを必要としよう。

これらの知識体系は、同時にまた、自覚大衆によって積み上げられて行かねばならない。間違っても政治家や官僚、自己信仰のための「主義」とやらに盲目的に従順な科学者などによって操られるようなことがあってはならない。

## ●自己治癒力の希望、環境破壊の絶望

この電磁波の知識は、われわれの自己治癒能力に大きな希望を約束してくれる。もう片方では、あのレイチェル・カーソン氏の『沈黙の春』に匹敵する恐ろしい警告を発している。

この著作は、われわれのエコロジカルな危機を白日のもとにさらしている。

そして地球規模の環境保護運動が生まれるきっかけとなった。

われわれは、カーソン氏が警告したのとは別のもう一つの目に見えない危機に直面している。

私はそれを確信している。

そして、この危機に立ち向かう術は、市民による一致協力した行動のみである。